

「桜をながめるころ」

茨城県 安禅寺 染谷典秀

桜の季節です。

私たちは、桜の花を愛で、散りゆく桜をさびしきを感じながらながめます。

ここで、「桜と私たちは同じ」と申し上げるのは、唐突に過ぎるでしょうか。桜をながめることは「桜と私たちは同じ」であることを、深く感じることです。

それでは、桜と私たちは、どのように同じなのでしょう。

第一に、世界とつながっていることです。

桜は、大地に根を広げています。そこから養分をもらい、自らの生きる力とします。散った花と葉は、大地に帰っていきます。太陽の光を光合成によって取り込み、二酸化炭素を吸収し、酸素を排出します。

同じように私たちも、呼吸し、食事をし排泄することで世界とつながっています。

孤立した存在ではないということです。

第二は、常に変化し続けていることです。

蕾から開花、落葉の過程は、桜が常に変化し続けていることのあかしでありましょう。

私たちも、常に変化しています。昨日の私と今日の私は、一見変化していないように思えますが、呼吸・食事・排泄によって、私たちの体の構成要素は入れ替わり、物質的にいえば、一年で別人になるといいます。年をとることもそうでしょう。

変わり続けていることは、一面さびしく切ないことですが、変わり続けているからこそ、桜の花は咲くし、私たちが直面する困難において、事態が好転していったりするのです。

第三は、今・ここを、いのちを限りに生きている存在だということです。桜も私たちも、今ではない「いつか」、ここではない「どこか」に存在することはできません。

「今」という時間、「ここ」という場所で、いのちを限りに生きているのです。

大正昭和期の作家岡本かの子は、桜を深いまなざしでながめるころを、次のように詠っています。

桜ばないのち一ぱいに咲くからに

いのち
生命をかけてわがながめたり